

- 1 派遣期日 平成 29 年 8 月 31 日 (木)
- 2 研修先 学校名 福島県二本松市立渋川小学校
所在地 福島県二本松市渋川字神明森 2-7
<http://www.city.nihonmatsu.lg.jp/site/shibukawa-es/290421-4.html>

3 研修内容 平成 29 年度 第 5 回 授業研究自主公開

(1) 視察校の研究の取り組み

研究テーマ： 学びつながる 2017 ～夢中になって学ぶ子どもの育成～

渋川小学校は、1 年間に何度も研究授業を実施し、算数科に精通されている先生方を講師に招いて研修されている研究熱心な学校である。講師に来ていただいた時は、研究授業後には、『授業について考える会』と称して、「子どもがどんな学びをしていたか。」「どこで学びが滞ったか。つまづいたか。」など、子どもの学びの事実焦点をあてた話し合いがなされている。

招いた講師は、4 月に東京大学大学院教授 秋田貴代美先生、6・7 月に福島学院短期大学教授 宮前貢先生であった。

① 学び会える校内研修

渋川小学校では、校内研修のことを「先生方に見せるために行うのではなく、目の前の子ども全員の学びを保証するために行い、その難しさや面白さを共同で話し合う場」としている。教職員が子どもの学びのために授業力・教師力を高め合い、子どもの成長を目指して取り組んでいる職員の意識の高さを実感した。

② 大切にしている「学びつながる」子どもの姿

どの子どもも切実な問題意識をもち、もの（教材・学習対象）、友達、教師とつながって集中し、夢中になって学びながら、自分の学びを価値あるものへと高めていこうとする姿を目指している。次期学習指導要領のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」で求められている内容にあてはまる。

③ 課題設定の工夫

単元あるいは一単位時間の中に、「共有の課題」と「ジャンプの課題」の 2 つを設定している。「共有の課題」とは、学習のねらいと子どもの実態をふまえた課題のことをいう。「ジャンプの課題」とは、自分一人では解決が難しかったり考えの違いが生まれたりするような課題のことをいう。

「共通の課題」では本時の課題を解決する基礎を理解し、「ジャンプの課題」ではその基礎をもとに友達との学び合いで解決を図っている。

④ 教師の実践テーマの設定

「子どもたちをこんな子どもに育てたい」「子どもたちとこんなことがしたい」という教師の思いと学校のテーマをもとに、教師一人一人が研究テーマを設定している。

(2) 視察校における授業の実際

【 第 4 学年 算数「1 億より大きな数を調べよう」 】

「共有の課題」では、0 から 9 までの数字を使って 1 番大きい 10 けたの整数を作る活動を通して、位の大きい方から順に大きい数字を書いていけばよいことを確認した。また、1 番小さい 10 けたの整数を作る活動を通して最小の時の 0 の扱い方を確認し、1 を 1 番大きい位におき、後は 0 も含めて小さい数字から順に書いていけばよいことも確認した。

「ジャンプ問題」では、0 から 9 までの数字をどれも 1 回ずつ使ってできる 3 番目に大きい整数と 3 番目に小さい整数を考える課題が出された。また、35 億に 1 番近い 10 けたの整数の課題も出された。子どもたちは集中して静かに課題に取り組む姿が見られ、自力解決が難しくなると隣の友達に相談して課題を解決していた。課題は子どもたちにとって難しく、全部解決できた児童はいなかった。

(3) 授業について考える会

100 人を超える参観した先生方が 1 グループ 10 人ほどになり、授業についての話し合いを行った。「3 番目の整数を求めるジャンプ課題は、難しかったんじゃないか。」「2 番目の整数を求める問題をみんなで確かめてからだ」と、取り組みやすかったのではないかなど、子どもたちが課題を解決するための手立てを話し合った。

研究授業者からは、参観の視点「夢中になって考え続けることのできる課題であったか。」が出されていた。視点から考えると、与えられた時間集中して課題に取り組み、解決目指して友達と学び合う姿が見られていたので、教師の目標は達成できたと思う。

(4) 講演会「質の高い共同的な学びをデザインする」

学習院大学教授 東京大学名誉教授 佐藤 学 先生

①授業について

今回の訪問で 4 年目の来校を迎え、子どもたちの成長の様子を知っているので、以下の 3 点を話していらっしゃいました。

○「子ども同士がつながって学び合う姿」「子どもの学びを中心とした授業デザイン」が年々深まっていること。

○静かに学習する姿は集中しているので、とてもよい雰囲気であること。

○ジャンプ問題は、適切であったこと。子どもはより高い課題に対して友達と学び合うことで、むしろ基礎的な力がついていくこと。

②質の高い学びを求めて

○学びは既知の事柄の発表や交流ではなく、未知の事柄の探求である。

○学び合いとしてのグループ活動においては、すでにわかっていることは個人で作業すればいいので、話し合う必要はない。疑問を抱き、あるいは新たな気づきが生まれたとき、ともに探求し合う学び合いが実現する。

○学び合いが成立しているグループ活動では、話し合いは行われていない。よく学び合っているグループの特徴は、つぶやきとささやきで学びが進行している。つぶやきによって結ばれた学び合いが共同の思考と探求を生み出す。

○質の高い学びとは、3 つの要件で定義している。

・「真正の学び」： 教科の本質に即した学びのことで、テキストや資料を用いる。

・「聴き合う関係」： 学びは対話的实践（テキストとの対話・他者との対話・自己との対話）であり、対話は聴き合う関係で成立する。聴き合う関係を基盤とする学び合う関係は、一人一人の子どもを学びの主人公にする教室を生み出す。

・「ジャンプの課題」： 協同的に学び合うからには、一人では到達せず、「三人寄れば文殊に知恵」として達成できる課題でなければ、充実した深い学びを実現することは不可能。質の高い学びは、ジャンプする学びなしでは実現しようがない。

4 感想

○ 研究熱心な渋川小学校は、教職員自らが「自分たちから学ぼう」と協同的な学びを実践して、すばらしいと思った。また、数年にわたり研究実践を続けているからこそ、「児童同士の自然な学び合い」が上手にできるようになり、今後は「学びの質を高めること」が課題と知り、教職員が共通理解のもと継続して実践していくことの大切さを実感した。

○ 教師は「全員がわかる授業」を求めがちであるが、それでは課題が低すぎる。授業前半は教科書レベルの課題（共有の課題）とし、後半は教科書レベル以上の課題（ジャンプ課題）によって協同的学びを組織するとよいことがわかった。「深い学び」の展開に課題があったので、自分の授業改善に向けての大きな一歩となった。

○ 分からない問題を友達に聴いて解くことができたり、その結果、次の問題は自分で解くことができたりした経験の積み重ねが聴き合い学び合う関係を広げることになることや、解決する楽しさを味わえるような適切な難易度の課題を工夫する大切さを改めて学んだ。

○ 子ども同士で学びの質を高められるような授業を目指して、今後も研修に努めたい。